をしてゐた。

『何うです、お退屈でせう』と例の如くいふから、

『いゝえ、退屈ではありません』と言つた。

『靜坐をおやりですか』

『えゝ靜坐をやつてゐますと少しも退屈ではありません。そして外のことを考へないから、氣が沈むやうなこともないです』

『靜坐は好いですな、私も靜坐を始終やつてゐますが』

『さうですか、靜坐は第一氣分を快活にしますから』

『えゝさうです、そしてこゝでは悲觀するのが一番毒です。何でも靜坐でもやつて快活にしてゐるのが好いです』

『さうですね、悲觀するのは馬鹿々々しいですな』

『そして爰では悲觀しても通りませんから』この『通りませんから』といふ一語が妙に私の氣分を壓迫するものであつた。私はこゝで語頭を轉じた。

『けふ本を入れて貰へないでせうか』

『なあにあなた、今朝筆記を願つたぢやありませんか』

『えゝ筆記も願ひましたが、私の持參した本を入れることも願ひました』

『看守長は何と言ひました』

『筆記は駄目でしたが、「哲學や宗教の書類なら入れてやつても好い」といふお話でした』

『さうですか、許可になれば這入る筈ですが、今來なくては或は許可にならないのかも知れませんよ』

『困りましたな。机は何うでせう』

『本がなくては机ばかり入れても仕方がないでせう』

『それはさうですが、何とか早く本を入れて貰ひませんでせうか』

『あしたは日曜で駄目ですから、あさつて私の方から早く願つておきませう』

『何うかさうして頂きます』

看守は扉を締めてから、外の監視孔のところへ自分のテーブルを持つて來て、その上で本の名を一々書きつけた。凡て囚人の持參して來て領置所にある品物は、擔當の看守から『監下げ願』といふ手續きをして貰はなければ、監房に入れることが許可にならないのであつた。

私はあすは日曜だといふことを聞いて又失望した。どうしても明後日まで待つてゐなければならなかつた。そして明後日の朝看守から願つて貰つても、その日のうちに本が這入るか何うか、それも疑問であつた。

看守が歸つてから私は又瞑想に耽りながら靜坐をやり初めた。そして凝として就寢の時刻になるまで坐つてゐるのであつた。窓の外が暗くなつて室内に電燈がつくと、獄中は一層靜かになつて、瞑想に耽るには好適の場所であると思はれた。かくして私は獄中の一日を過ごしたのであつた。

### 日曜の大掃除

翌くる日は日曜であつた。日曜には多くの看守も休むと見えて監内はしづかであつた。たゞ當番の看守のみが折々監視孔を覗くに過ぎなかつた。

日曜には晝食後いつも大掃除をやることになつてゐた。窓の硝子戸を外して室内の中央の柱に立てかけ、薄緣や薄團を眞中に疊みよせて床板は勿論、柱や板壁や窓の敷居に至るまで室内を悉く拭くのであつた。

掃除が出來上ると二人の看守が廻つて來て一人は室内を綿密に檢査し、一人は囚人を監房の外の廊下に立たせ、帶を解かせて身體を檢査するのであつた。檢査が濟むと新しい用水を補給するのである。給水は毎日朝食後に行はれた。

私は日曜の大掃除が好きであつた。それは室内を清潔にするといふよりも一つは獨居の無聊を慰むるため、一つは運動のため、も一つは自分の顏を寫し見る爲であつた

特に少しく寒い日などは私は好んで掃除をやつた。凝として坐つてゐるよりも立つて力任せに柱や板を拭くと、運動にもなり防寒の手段にもなつた。そして獄中ではいくら退屈しても立つたり、歩いたり、窓から外を覗いたりすることを禁じられてゐるから、退屈を避くる爲めには掃除は最良の手段であつた。

私は入獄してから自分の顔を見たくて堪らなかつた。殊に今まで長く延ばしてゐた髪を二分刈りに短く剪んだ時には、どんな具合だか見たいといふ好奇心が強かつた。そして又獄中でやつれた模樣なども時々見たいと思ふことがあつた。併し監房には鏡などはなかつたから、私は窓硝子を應用した。

それは大掃除の時に先づ硝子戸を外して、兩手に持つたまゝ窓の敷居の下の板に近づけると、そこが少しく光線を遮られて暗くなつてゐるため、窓の明りを受けてゐる自分の顔がハッキリと映つて見えるのであつた。又柱に立て懸けてあつても、それと正面向きになつて身體の光りを反射させると、よくうつるのであつた。かくして私は私の顔や刈つた頭や獄衣を着た赤い姿などを眺めることが出來た。そのために私は日曜の大掃除を好むやうになつた。

入獄して五六日經つた或る日のことであつた。看守が『あなたあたまは何うします』といふから、入獄すれば屹度髪を短かく剪まれるといふことを聞いてゐた私は、『刈らなくてはいけませんか』と念を押して聞いて見た。すると『えゝ刈るのが規定ですが……』と何處までも溫和な態度に出るので、私も我が折れて『ソンナラ刈つて貰ひませう』と斷然言ひ切つた。刈るのが無論惜しかつた、併し獄中では櫛もなく又頭を洗ふ水さへ與へられず、そして殊に自分のやうに二日と櫛を入れないと、フケが耳や首のあたりにこぼれ落つるほど多いものは、何うしても刈るより外に仕方がなかつた。

『それなら剪んでゐらつしやい』と言はれて私は出て行つた。

理髪所は第一監の入口の右側にあつた。そこには鏡もなければ頭を洗ふ流しも附いてゐなかつた。內部に這入ると眞中に粗末な椅子を一脚おいて、そこに一人の懲役囚の

理髪師が汚れた白い上衣を獄衣の上に着て立つてゐた。『刈るんですか』『えゝ短かく刈つて下さい』と言つて私は眞中の椅子に腰をかけた。

その時理髪囚の看守が突然高い聲でそして横柄な態度で私に話しかけた。

『お前はどこから來た』

『はい、第四監から來ました』

『それは解つてゐるさ、お前はどこだと聞くんだ』

『住居ですか』

『ウム』

『小石川』

『しやうばいは何だ』

『……』

小生意氣に怪しからんことを聞くと思つて默つてゐた。

『刑期は何ヶ月だ』

『禁錮二ヶ月……』

『それではお前も運轉手か』

『……』

又私は默つて了つた。私は入獄してから此の時ほど癪に障つて腹が立つたことはなかつた。又これほど侮辱されたと思つたことはなかつた。私は『俺はたとひ囚人であらうが、貴樣等に侮辱されて堪るもんか』といふ氣がムラ〳〵と腹からこみ上げて來た。私は無知な無能な、そして生意氣な哀れむべき看守に對して、心から愛と同情とを有し得るほど修養が積んでゐなかつた。

理髪が濟むと私はサッサと自分の監房へ歸つて、そして室内の小さい圓い流しの上で頭を洗つた。私はこの日一日腹の蟲が騷いでゐて氣持が惡かつた。併し髪を剪んだお蔭で毎朝掃除の水を利用して頭を洗ふことが出來た。

理髪は月に二度あつた。私はその後出獄するまで三度び顔を剃つたが、白い上衣を着た四十格好の理髪師と、そこにねて監視をする看守とは、いつも同一の人間であつた。

## 樂しい入浴

獄中で一番氣持ちの好かつたのは入浴であつた。毎日一回の屋外運動も最初は好かつたが、だん〳〵寒くなるに從つて出るのが厭やになつた。併し寒くなるに從つて益々戀しくなるのは入浴であつた。尤も入浴時間も運動と同じく極めて短時間であるが、入浴した日の半日は凡ての苦痛を忘れるほど好い氣持ちであつた。

入浴は一週間に二度あつて月曜日と木曜日であつた。(併し特殊の病氣を有する囚人には別に藥湯があるので、それは二回以上或は毎日あつた樣に思ふ)。私は入浴が好きで月曜日が經つと木曜日を待ち、木曜日が過ぎると次ぎの月曜日を待つてゐるといふ風であつた。殊に雨が降つて寒い日などは次ぎの入浴日が待ち遠しい程であつた。其時私は鄕里の溫泉場を憶ひ出さずにゐられなかつた。そして半日も一日も否夜も晝も溫かい天然浴槽の中に浸つてゐたいものだと憧かれるのであつた。

入浴はいつもその日の午前中であつた。禁錮囚のものは被告(未決囚)のものが濟んでから這入るので、大抵午前九時から十時前後の間であつた。被告の入浴が濟むと看守が『受刑者入浴用意!』と叫ぶので、その時囚人は褌をとつて手拭を準備してゐるのであつた。受刑者は無論石鹼を使ふことは出來なかつた。

浴室は階下の廣場の南側にあつた。それは第二監と第三監との間に造られてあつた。浴槽は一方の壁にクッ附けてコンクリートで造られ、そして五つに仕切られてあつた。その仕切りには各々三尺高さの廻し戸を仕付け、仕切りの中には洗ひ桶も小さい水槽も出來てゐて、囚人が一つの仕切られた浴槽に一人づつ這入るのであつた。併しその浴槽は孰れも五六人はゆるやかに這入れるほどの大きさであつて、そしてお湯は可なり綺麗であつた。それは石鹼を許された被告が數多這つた後でも、浴槽の中に

は手拭を持つて這入ることを絶對に禁じてゐるばかりでなく、中で手や足を洗ふことすら禁じてゐるので、お湯が少しも濁つたり汚れたりしない爲めであつた。

浴室には一人の看守が附いてゐた。浴槽の前には笠や獄衣を脱いでおく棚付けの箱のやうなものが置いてあつた。囚人が浴室の中に這入ると看守は『第何號』と浴槽を指定するので、獄衣を脱ぐとその指定された浴槽の中に入浴するのである。入浴時間は僅かに五六分乃至多くて十分間位のもので、一度浴槽の中に沈んで槽外に出ると手早く頭や體の周りを洗つて、それからも一度沈んで上らなければならなかつた。若しユックリ頭や體などを洗つてゐると看守に『上がれ』と言はれるので、再び浴槽に沈まずに上ることもあつた。

それでも中には隨分狡い横着なものがあつて、『上れ』と言はれてからも看守が他の浴槽の前に行つてゐる隙を窺つて、他の二倍も長く這入つてゐるものがあつた。その時看守が默つてその囚人の背中やお臀の筋肉を赤くなるほど捻るのであるが、いくら捻られてもその囚人は一向平氣であつた。

入浴日にいつも、不愉快に思ふのは、中央の階下の廣場を通ることであつた。手拭を下げで階段を降りて行くと、自分と同じ編笠を冠つた和服姿の被告人が三十人乃至四五十人も五列若しくは六列の横隊に並んで、廣場の冷たいペエヴメント(たゝき)の上に立つてゐるのであつた。そして二三の看守が彼等に一々腰繩を付けたり、手錠を篏めたりしてゐた。それは裁判に出頭する被告が毎朝この廣場に整列するのであるが、その物々しい哀れな、そして忌まはしい光景は、何うしても社會では見らない。私がその傍を通りすがりに彼等を覗き見るやうに、彼等も亦獄衣姿の自分を興味をもつて覗かうとするのであつた。私はその時の感じを永久に忘れることは出來ないだらう。

私は出獄間際になつて入浴の時、思ひがけなくT・M君に遇つた。同君が入獄されたことは少し前に典獄から聞かされてゐたが、獄内では絶對に遇ふことは出來ないものと考へてゐた。所が幸ひにも偶然遇ふことが出來たのだから、その嬉しさ又お互の

哀れさは胸に溢れるほどであつた。同君とは素より唯一度の面識だけで深い親交はなかつたけれども、今春以來の事件に於て、其事件の性質及び結果において、決して無關係の人ではなかつた。

遇つても素より親しい話は出來なかつた。私が第四號の浴槽に這入らうとすると、同君がその浴槽から上る所であつた。その時私は『あなたはT・Mさんでしたね』と聞くと、同君は『あゝさうです』と笑ひながら答へるので、『僕は野村です』と言つた丈けであつた。その次ぎの入浴の際にも顏を合せたのであるが、最後の入浴日には遇ふことが出來なかつた。

## 獄中の寒氣

獄中では何が一番ひどいと言つて、凡そ寒さほどひどいものはあるまい。又何が一番殘酷だと言つて、凡そ寒さほど殘酷なものはあるまい。私は幸ひにして極寒の時期に遇はずに出獄したのであるが、それでも一番苦しんだのは矢張り寒さであつた。

寒氣は獄中における囚人の最大の恐るべき敵であつた。若し寒さといふものが襲擊して來なかつたならば、囚人は左程苦しいものではない。猛烈な寒さに對しては如何に强健な、いかに頑固なものと雖ども、悚然として戰慄するほど深刻でそして又殘酷なものである。よく私達は何か吃驚して『慄ひあがるほど怖かつた』といふが、併し何者にも吃驚しないで生命自身が自發的に慄ひあがつて來るほど、怖ろしいものはない。獄中の寒氣は卽ちそれである。

それもその筈である、獄中の寒氣は全く私達が現實において感じてゐる普通の寒氣と違つてゐる。普通の寒氣は外部から襲擊して來るが、獄中のそれは內部からやつて來る。從つて前者に對しては防禦の手段はいくらもあるが、後者に對しては何等の手段もない、否凡ての手段が杜絕されてゐる。そこに言ふべからざる苦痛と戰慄とがある。

看守も言つてゐた、『囚人も寒さがないと樂だが、寒さには可愛さうだ。これで一番

時候の好いのは矢張り十一月迄だ、一月二月の寒さと來たら全くやり切れない』。處がT・M君やその他の人々が極寒の一二月を通さうとして居るのを憶ふと、私は出獄してもゾッとする。T・I君の行つたときも十二月頃の寒い日などに、『監獄の景氣はこれからだ』といふやうなことを言つて看守は脅してゐたさうであるが、併しそんな威かしによつて景氣のつく寒さではない。それはむしろ男泣きに泣き度いほどの寒さである。

私は二ヶ月の間、最初の一週間は單衣を着、最後の四日間は綿入れを着、その間袷をきて夏から冬にかけて通したのであるが、單衣の時は早く袷をきたいと思ひ、袷の時は早く綿入れをきたいと思つて、始終寒さに追ひかけられてゐた。併し體が弱り健康が衰へるに反比例して寒さが增して來るのであるから、其感じは益々鋭敏になり益々深刻になるばかりであつた。九月末の或る夜中に、私がフト眼を覺して見ると、蒲團を背の方に冠つて內伏せになつたまゝ腹を薄緣の上にヂカに押し付けてゐた、そのために腹が冷えて眼がさめた。それは寒い夜であつた。

廊下には二人の看守が立つてゐた。彼等は寒さに慄へてゐる樣子であつた。一人の看守が『ウ、、、、寒いなあ、迚もやり切れない』と慄えながら言ふと、他の看守も合槌を打つて『本當に今夜は寒いなあ、看守も夜勤がないと好いが……』とこぼしてゐるのが微かに聽えて來た。私は彼等の職業を哀れみながらその寒さに同情してゐた。

處が十一月頃になつたら看守に同情した寒さが自分のところへやつて來た。それは同情を失つた代りに殘酷をもつて戻つて來た。そして單に夜中にのみ襲擊して來るのみでなく、晝も朝から絕えず襲つて來ることがあつた。夜は蒲團があるので何うにか我慢が出來たが、晝は如何ともすることが出來なかつた。

私はT・I君に敎へられたやうに、夜は蒲團の左緣を體の右側に深く敷き込んでそして右側を下にして寢た、すると體がキチンと蒲團にくるまるのみでなく、右側の下敷が蒲團が二枚に重なるので頗る寢心地がよかつた。そして足の先きの方は丁度蒲團

が三角袋になる樣に疊み込んだ、それでも寒い時は足が冷えるので、二枚あつた雜巾の一枚をよく乾しておいて、それを丸くして三角のやうになつた蒲團の中に入れた、さうすると室内の風は足の方に侵入して來なかつた。

これは外部の寒氣を防ぐ手段であるが、體の内部から來るものは何うすることも出來ない。腹の底から冷えて來たり、膝の關節の中からヂク〳〵と痛み出す時は、唯ワクワク慄えながら其襲擊に委しておくより外に方法はなかつた。晝の内に侵入された體内の寒さが、寢てから朝起きるまで除かれないことが屢々あつた。

晝間の寒さは靜坐法によつて擊退しようとしたが、大した効力はなかつた。榮養不良によつて、心から弱つてゐる體は、寒暖計よりも鋭敏であつて、寒さが押し寄せて來る時には、丁度刻々增水する河の水がだん〳〵自分の體を浸して來る樣に感じられた。それと同時に言ふべからざる不安と恐怖とが伴つた。

さういふ時には迚も凝として居れなかつた。無論瞑想するとも又讀書することも出來なかつた。私は全身の力を丹田に集注して手を胸の上に固く拱いたまゝ、體を絶えず搖つてゐた。そして意識は全く寒さと不安の現實のみで充されて、その外に何等の餘裕もなかつた。それでもドシ〳〵寒さが襲擊して來るので、私は五分乃至十分おきに背部の帶の上の邊と兩足の膝とを、兩手をもつてゴシ〳〵と力を入れて摩擦しなければならなかつた。摩擦してゐる間は一時そこに熱が生ずるので、局部的に寒さを忘れるが、止めると直ぐ又襲擊して來るのであつた。

かういふ日が三日ほどあつた。朝食が濟むと端坐して、腕組みをしたまゝ晝食になるまで體を搖すり、晝食が濟むと再び夕食になるまで體を搖すり、夕食から又就寢まで絶えず體を搖つてゐた。瞑想に耽る餘裕も書物を繙く氣もあつたものでない。その頃丁度典獄の好意で英獨の書を入れて貰つたのであるが、それを傍に置て表紙を見てゐるのさへ物憂さに堪へなかつた。私は本當に泣き度いと思つた。

第一困つたのは兩足の膝であつた。就寢時までに氷のやうになつてゐる膝が、夜寢

ると骨髄からヂク〳〵と痛み出して來た、そして朝まで氷のやうであつた。朝床の上から窓を眺めて空が曇つて寒さうに見えたりすると、一時に不安と恐怖とが襲つて來た。そして起き上るのが厭であつた。

私はとう〳〵診斷を受けて增着を願つた。醫者も私に同情して呉れて『お體は別に惡い所はないが、寒いやうですから袷を一枚增して上げませう』と言つた。私はその時ほどうれしいと思つたことはなかつた。

出獄する四日ほど前に綿入れが渡つた。併し丈けの短かい綿入れは暖かみにおいて二枚の袷と大差はなかつた。私は此綿入れで一月や二月の極寒を通せるだらうかと思つた。否私は今一ヶ月置かれたら或は慄え死にしたかも知れない。

## 出獄の朝

二年とか三年とかいふ長い刑期なら、隨分出獄の日が待ち遠しいであらうが、私のやうに極く短かいものには何でもないことだと思つてゐた。

ところが實際を白情すると、私には私の刑期が決して短かいものではなかつた。私は出獄の日が待ち遠しくてならなかつた。出來ることなら一日でも二日でも好いから、早く出して貰ひたいと望んでゐた。

出獄の二週間程前に、布施さんの嬉しい訪問を受けたときに、假出獄恩典の話が出來、『田川さんの時の前例もあるのだから、せめて一週間でも好いから、それ位の恩典がありさうなものだがね——私もよく典獄に話してはあるが——』と言ふことであつた。

私は刑期が短かいのだから迚も假出獄などいふことはあるまいし、又無くつたつて後二週間位はどうにも辛抱が出來ると思つて、大した期待はかけなかつた。

併し寒さに苦しめられる時は、何うしても期待をかけずにゐられなかつた。『一日でも好いから早く』と言つたやうな焦つた感じが、絶えず起つてゐた。そして寒さといふものは、今日暖かでも今夜にも襲つて來ないとも限らないので。それを思ふと恐怖

の感に充されるのであつた。

十一月になつてから典獄の室に二度ばかり呼ばれて、打ち解けて思想上の問題を愉快に話し合つたこともあつたが、さういふ時には『もしかしたら假出獄の相談でもあるのでないかしら』と、慾目に思ふこともあつた。

併し私は假出獄よりも天氣さへよくて、暖かでくれゝば却つてその方がいゝと思つた。そして何とかして大した寒氣の襲撃を受けたくないものだと、希望せずにゐられなかつた。

それで私をして當てにもならぬ假出獄を望ませたり、一日でも早く出獄したいといふ子供のやうな感じを起させたのは、皆寒さの爲めであつた。そして寒さは一日毎に増して來るが、出獄の日は決して一足飛びに來てくれなかつた。

けれども後一週間といふ頃になつた時は、流石にうれしゝて堪らなかつた。そして『いくら寒いだつてあと一週間だ』といふ元氣が、押へ切れなかつた、

私はその時、妻にあてゝ次のやうな手紙を書いた。

『いよ〳〵最後の樂しい、そして終生忘れがたい此手紙を出すこととなつた。何と云つても後一週間經てば、美代子（私の子供）のお琴を聞かれるのが嬉しい。これ皆母ちやん(妻のこと)の眞心からの親切と愛情とによることと思ふ。先達突然の訪問をうけた時は涙が出るほどうれしかつた。あれから一日毎に、否一時間一分間毎に嚴しさを増して來る寒氣の猛烈な襲撃をうけて、この一週間ほどは晝となく夜となく、實に難戰苦鬪をつづけた。その爲め足が冷えて痛むので診斷の上、十日から袷一枚を増して貰つた。又十日に典獄さんの好意で原書を入れて貰つたが、寒くて迚も讀む勇氣がない。

廿四日は朝起床同時(六時)に出獄するから、誰も來てくれる必要はない。着物は銘仙で結構だから羽織、袴、シャツを揃へて廿日か廿二日に差入れてくれ。出る日の朝持つて來ては間に合はないから、くれ〳〵も頼む。それから、當日は例の献立

を種々準備しておいて貰ひたい。御馳走を澤山拵へてくれ、(酒もねえ)、あゝ何と云つても嬉しい、あと一週間、そして非常に元氣だ。

十一月十七日　善兵衛より』

併し一週間は私にとつて餘りに長かつた。出獄後のことを考へたりすると、その間に狹まつてゐる一週間といふ不思議な隔たりは、恐ろしく長いものであつた。私は夜は成る丈け何も考へずに早く眠るやうに努めたが、それでも嬉しくて出獄後のことを考へずにゐられなかつた。併し考へた揚句は屹度失望した。それほど待ち遠しかつたのである。

教誨師がやつて來て、『いよ〳〵お近くなりましたね、併しあとの二三日が却つて長いものです』と言つて、出獄後の注意などを色々話してくれた。氏はいつも來る毎に私の健康狀態を聞いたり、世間話をしたり、又は雜誌の話などをしてかへるのであつた。

A看守も私が散歩に出るとき、後からのこ〳〵ついて來て、階段下り口のてすりに體を寄せながら、

『あとわづかになりましたね』と言つた。

『いゝ、お蔭さまで―、』

『うれしいでせう』

『――併し出ると一生懸命に働かなくてはなりません』

『それは結構ですよ、私らは――』

看守は言葉を中途で切つて、下を向いて何か考へに沈んでゐるらしかつた。そして私の出獄をいかにも羨ましいと言つたやうな態度であつた。

私は自分が出獄すれば無論自由の身で、自分の思ふ存分の仕事をすることが出來ると思つてゐるから、一生懸命に働くと言つたところで、それは皆私の自律的な仕事であつて、そこに何等の窘迫もないのである。併し看守などにはさういふ自由があるま

いと思ふと、私は囚人よりもむしろA看守の身の上に同情せずにゐられなかつた。

私は夜蒲團に入つてから、よくA看守の身の上を想像して見ることがあつた。どんな妻君で、子供は何人位あつて、上の子供は小學校の何年生位だとか、どこの町のどんな家に住んでゐるだらうなどと考へては、出獄したら屹度A看守の休みの日を見計つて訪ねて行き、そして獄中のことどもをしんみりと話し合つて見たいものだと想像した。

或る日A看守が來たとき、私はこの話をしたことがあつた、そして出來ることなら住所を知らして貰ひたいと言つた。するとA看守は謹直な人と見えて、『それは御親切ですが、こゝの規則としてさういふことは出來ないことになつてゐます』と、いふとこであつた。

廿日には妻が來て着物を差入れてくれたらうと思つたが、看守の方からは何の知らせもなかつたので、ヒョットしたら廿二日に持つて來るかも知れないと想像した。

いよ〳〵廿二日になつて、あしたも一日だといふ感じがした。ところが廿三日は祭日であつたので、一層長いやうに思つた。

廿二日の午前中、典獄のところに呼ばれて出獄の申渡しがあつた。典獄のいふ所によると、いくらか恩典もと考へてはゐたが、目下當局の思想取締りが嚴重なため、恩典がなかつたのは氣の毒であるが、併し刑期中無事壯健で通されたのは、何より滿足だといふことであつた。私は

『いゝえ恩典どころではありません。私はこゝに來て、典獄さん初め凡ての看守に非常に優待されたのを、何よりも有りがたく感謝してゐます』

と言つて引き下つた。

私は若し私の出獄日を忘れて一日でも延ばしたら承知しないと思つてゐたが、しやうばい柄決してそんなことのある筈はなかつた。廿四日に出獄するものは私の外に例の運轉手と、一年何ヶ月かの懲役囚との三人であつた。私はその懲役囚の刑期をよく

も間違ひなく、計算してあるものだと思つた。

午後夕食を濟ましてから看守が監視孔のところに來て、着物の差入れのあつたことを知らせてくれた。そして紙片を見ながら『黒羽二重の紋付羽織一枚、仙臺平の袴一着、糸織りの着物一重ね、羽二重の長襦袢一枚、紺色小縮緬の兵兒帶一本、純毛の襯衣一着、黒孺子の足袋一足、と一々丁寧に讀み上げた時は、私は何が何だか解らなかつた。

ただ着物が來て安心だといふことと、廿四日には間違ひなく出獄が出來るといふことと丈けは、確實な事實だと思つた。

廿三の午後には、最初入獄した時『領置』に預けておいた着物や、妻の入れてくれた着物などを受取つたり、體量を計つたりした。私は二ヶ月の間に壹貫四百目程しか體量が減じなかつた。

いよ〳〵明朝出獄だといふ廿三日の夜は、さすがに思ひ出が深かつた。私はたそがれ時から茫然として思ひに沈んでゐたが、出獄後のことよりもむしろ入獄中の色々の出來事が、走馬燈のやうに頭の中で續いた。私はチト起つて『報知器』を推すと、まだ歸らずにゐたA看守が

『何かご用ですか』と言つて監視孔をあけた。

『あしたはお目にかゝれませんから、今夜お暇を申しておきます』

『あゝ明日はお早いですな、まあ無事で結構でした』

『どうも大へんお世話になりました、そして始終ご深切になつたことを感謝します』

『まあ出てからは體が大事ですから、お大事になさい』

『何とも有難う御座います』

私は一ヶ月の間深切にされて、その恩誼に感じてゐた親しいA看守に別れるのが、何となく心細いやうな氣がした。併しあした出獄だと思ふと、何うしても嬉しくて堪らなかつた。

隣室の十三號室にゐた被告囚の青年が、

『野村さん、あしたご出獄ですか』と言つて、寢床についてから問ひかけた。私は

『えゝさうです、あなたは御壯健でいらつしやい』と言つたが、この言葉が若しか被告囚の心を痛めはしまいかと思ふと、私は急に氣の毒に思つた。

二十四日の朝は四時頃から眼を覺ましてゐたが、天は私の出獄に幸ひを與へないと見えて、雨がしどろに降つてゐた。私は鉛板屋根や樋をうつ雨の音を聞いて失望した。そして何も傘がないので何うしようかと思つた。

うす明るくなるのを待つて、蒲團を蹶つて起き出て、窓から空を眺めたが、雨は止みさうに見えなかつた。私が顔を洗つてゐると、ガチャンと鍵の音がして扉が明いたすると看守は

『サア、出ろ、出ろ！』と追ひ立てるのであつた。

私達は中央階下の廣場で、急いで獄衣から自分達の着物に着更えた。二ヶ月ぶりで初めて和服を着たときには、何だか大へん出世でもしたやうな感じがした。

看守達は私達の黒い着物を着更えてゐるのを見て、『お目出度う』といひたいばかりに、羨ましさうな表情をしてゐた。

看守に送られて正門を出る時は、雨はやむでゐた。

——《終》——

野村隈畔著
●現代文化の哲學　金貳圓五拾錢　送料十二錢
野村隈畔著
●ベルクソンと現代思潮　金貳圓五拾錢　送料十二錢
野村隈畔著
●自我批判の哲學　正價金貳圓　送料十二錢
大同館發行

大正拾年六月九日印刷
大正拾年六月十一日發行

文化主義の研究
正價金貳圓

著作者　野村隈畔　東京市神田區表神保町七番地
發行者　阪本眞三　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　青柳十一郎　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
發行所　東京市神田區表神保町七番地　振替貯金口座東京八七貳番　大同館書店

不許複製
大同館發行證
檢

◇橘惠勝氏著◇

—《印度佛教思想史の著者》—

最新刊

# 支那佛教思想史

—《菊判最上製美本全壹冊七百餘頁箱入正價金四圓八拾錢送料十二錢》—

**著者が多年苦心研究の大著出現** 本書は支那佛教の發達を史的に跡づけたるものである。支那佛教は支那人の理解したる佛教にして支那の民族性に基礎づけられたるものであるとする。支那佛教を移植して發達したる我邦の佛教を研究せんとするには先づ支那佛教の一般傾向と特色とを觀察して我邦の佛教と比較する準備をせなければならぬ。本書は支那思想の全體を批判的に取扱ひたる科學的研究の結果であるから **廣義に支那思想史** として見ることが出來る

——《著者識》——

日蓮宗大學講師 小林一郎 新著

好評三版

# 日蓮主義概論

日蓮主義は現代の人の宗教的要求に應ずべき最も進歩せる教義なり。國運の發展も個人の安心も此の教義に基づきて初めて可能なり。本書は著者が囚はれざる自由の見地より日蓮聖人の眞精神を發揮せんが爲に特に執筆せるものにして先づ華經の極概を擧げ次に聖人の教義の精髓を語り現代思想との交渉近世科學との關係を論じ眞面目に其所信を告白せるものなり思想問題に注意せる人は必ず一本を手にせざるべからず。

白六判最上美本箱入 正價金貳圓八拾錢 送料十八錢

大同館發行圖書目錄

東京帝國大學文學部教授 文學博士 宇野哲人氏 新著 《四六判最上製 美本五百餘頁》

第貳版

# 支那哲學の研究

**支那哲學史講話の姉妹篇** 本書は上は三代より下は近世に至り或は一代の思想を概論し或は特殊の問題を細觀し支那哲學に關する博士獨特の研究は殆んど此書に網羅せらる。講話を讀んで略々大意に通ずる者は更に此書に就て斯學の堂奧に參せよ。

正價金貳圓五十錢 送料十二錢

東京帝國大學文學部教授 文學博士 宇野哲人氏 新著 《四六判最上製 美本三百餘頁》

最新刊

# 二程子の哲學

**支那哲學の權威** 著者は常に明道程子を推稱して孔孟以後の第一人とし私淑するもの玆に年あり。明道程子の哲學は實に玆に此の信念に本づきて成る。既に明道の爲人を知れば與に共に聖學を倡明せし伊川程子も亦吾人の知らねばならぬ所特に二程子は其學風夫れ特長ありて後來宋學の二大學派を開き宋學に於て最も重要なる位置を占むるのでこゝに伊川程子の哲學をも併論する次第である。善く讀む者は此書の獨り二程子其人を髣髴せしむるのみで無いことを知るであらう。

正價金貳圓 送料十二錢

ドクトル フイロソフイエ 上田恭輔先生著（類書は皆本書から取れるもの也）

好評三版

# 生殖器崇拜教の話

袖珍洋裝美本 全壹冊百六拾餘頁

正價金六拾錢 送料二錢

本書は當今大人氣の性慾問題を提へて流行の風潮に乘ぜんとするキワ物では御座らぬ本書は紀州の南方熊楠先生と共に嘱れたる二人學者の世評ある大蓮の上田先生の舊著を改版したものである本書には既に英譚より佛譚あり生殖器崇拜問題を學術的組織的に研究したる本邦最初の試みである、敢て識者の一讀をすゝむ。

東京市聯合青年團講師 浦谷甫水氏著

好評再版

# 徹底せる心の生活

四六判最上製美本 全壹冊三百餘頁

金壹圓八拾錢 送料十二錢

國民として思想の動搖●精神の不安實に今日程ど甚しきはなし。此時に際會せる青年少者の心事洵に同情寒心に堪へざるなり。本書は著者が體驗自得せる自己の信念を極めて平易に吐露し以て彼等の精神に一道の光明を寄與し其の生活を意味深からしめんとせるもの。一言一句皆其の肺腑より出で痛切懇篤にして生氣潑剌たるは勿論徹底的精神的に人生を觀超然として悠々自適而もなほ能く眞面目に奮鬪的氣分を高潮せる一大修養書也。



□東京帝國大學文學部教授 東京高等師範學校教授 文學博士 宇野哲人先生新著

拾貳版

# 支那哲學史講話

菊判最上製本 全壹冊五百頁

正價金 貳圓五拾錢 送料十八錢

本書は上古より清末は至る迄の支那思想の大要を極めて平易簡單に叙述して最もよく要領を盡くせるものなり。特に清朝に於ける學術思想の變遷が如何に暗々裏に革命を惹起するに至りしか、支那の新人の思想は如何なる傾向を帶ぶるかは著者の最も留意せる所にして從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依て補足せられて亦遺憾なし。本書は又附錄として一々原文を掲げて直ちに堂奥を窺ふの使に供し亦著者の議論の根據あるを知らしむ。要するに本書は初學者にも專門家にも座右に缺くべからざる絶好の新著なり。

橘惠勝著

# 印度佛教思想史

菊判最上製本紙數六百頁 金參圓卅錢 送料廿四錢

本書は大藏經典を歴史的に觀察して解說的叙述と内在的批判とに一の體系をなせるものにして聖賢自到の境地に導引せんとする案内書である、阿含・大集・華嚴・般若等の經典より論藏の全部に亘りて組織的解說をなし典據を明示したるが故に本書を手引とせば大藏の園林に遊ぶこと自在である。思想發達の跡を地理的に觀察して遺物によつて考證するが如きは考察の一方法に過ぎざれども本書の特色一である。——（著者識）——

◇永野芳夫氏新著◇

—《最新刊發賣》—

# 教育改造の原理

四六判最上製美本
全壹冊三百頁
正價金貳圓
送料十六錢

## 感賞の生活・智性の高調・現在の讃美!!

是れ改造の原理也。試驗の全廢・賞罰・廢止・學年制度の棄却・附加的權威の排除・藝術自由教育の徹底・固定道德律の破壞・現行歷史の埋葬・平凡宗教の蹂躪・過去の哲學、宗教、教育、藝術、道德は悉皆破壞され、こゝに新に建設の純芽を生ず是れ又一切生活の根本改造にしてラセルのそれより更に深遠切實也。教育家青年思想家に應む。

◇永野芳夫氏新著◇

—《第三版出來》—

# デューウィ教育學說の研究

四六判最上製美本
全壹冊三百餘頁
正價金貳圓
送料十二錢

澤柳博士は教育問題研究で論文を折角書いて下さつてこの拙著をばあまねく教育界に推薦されましたその他多くの學者や讀者諸君からの感謝や讃辭の手紙も澤山にいたゞきました自畫自讃でなくこの書を讀めば必ず自己の頭が變へられることと思ひます。新刊拙著「教育改造の原理」と共に無私の態度でおすゝめします。（芳夫）



□文學博士　波多野精一　序
□□早稻田大學教授　內ケ崎作三郎　序

# ベルグソンと現代思潮

野村隈畔新著

菊判最上製美本全壹冊
五百頁箱入
正價金貳圓五拾錢
郵稅十二錢

**好評六版**

本書はベルグソンと現代思潮との關係を說いて極めて詳密である。卽ち一卷の現代思想評論と見ることが出來る。世界の思想界が大なる興味を以て期待する所のベルクソンの哲學は將來益々創造的に進化し行くべき運命を有するものである。彼の哲學は現代實生活に伴ふ問題を充分に解釋することは出來ない。されども彼の哲學は現代の行詰りたる社會的並に精神的活動に對して新たなる生命を與へたのである。これは偉大なる事業である。今日の宗教政治文藝實業又は社會問題すらも彼の哲學の刺戟に依つて一陽來復の觀を呈して居る。この事それ自身に於て一大使命ではないか。野村君の新著はこの使命を解說するに精彩奕々たる文字を用ゐ一度之を手にすれば知らず識らずの間に讀了せしむる魔力ある文體に依つたのである由來哲學者の文章は乾燥無味の文字を使用し讀者の感興を殺ぐものは尠くはない。然るに著者の能文はベルグソンを祖述するに甚だ應はしと云はざるを得ない。予は本書の著者が更に發憤して日本のベルクソンたるの日あらむことを希望するものである。《內ケ崎氏談》

▲著者が心血を濺ぎて成りし最近出版界の大著▼

## 野村隈畔先生新著

# 現代文化の哲學

（現代思想界の權威）

菊判最上製美本
全壹册五百頁

正價金貳圓參拾錢
郵稅十二錢

## 第參版

現代文化の不健全であることは吾々の眞摯な生活要求に省みて何人も否定し得ない所、その根本方面と精神的統一とを失ひ更に政治と教育と宗教とはその本來の文化的意義と任務とを忘れて各々分裂し將にその歷史的生命を沒却せんとしつゝあるは否定すべからざる事實である。吾々の現代に於ける生活要求はこの不健全なる文化を改造して新しい撥剌たる自由文化を建設するにある。而して自由文化の建設に對してその根本方面を指示し且つ普遍的な文化價値を提供するものは政治でも教育でも又宗教でもなく健全にして徹底的な文化哲學であることは現代人の均しく認むる所なり。而も未だ眞の文化哲學なきは現代思想界に於ける最大の恨事であつた。然るに今現代の精神的乃至文化的要求を體驗せる著者は茲にその燃ゆるが如き心血を濺いだ文化哲學を公にせらる。之れ實に暗黑なる現代文化に對して一大光明を點ずるものであり、更に獨創的なこの新著は學界に對して大なる暗示たるを疑はない。

大同館發行圖書目錄

## 野村隈畔先生新著

# 自我批判の哲學

（現代文化の哲學の姉妹編）

四六判最上製美本
全壹册約六百頁

正價金貳圓
郵稅金拾貳錢

如何なる思索も如何なる哲學も自我の本性に徹底することより深遠なものはない。現時哲學界に於いて絶對自由の意志を說き、絶對價値を高調し或は生命の流動を主張するものありと雖も自我の具體的本性に徹底するものなきは現代の生活要求を裏切る根本的缺陷である。著者はカントの理性批判に慊らず、ベルグソンの直觀批判に滿足せず自ら進んで獨特な自我批判の哲學を建設した。是れ現代の生活要求を根本的に確實ならしめ且つ凡らゆる思想主義を批判的に基礎づけるもの蓋し我國最新の哲學であらう。而して餘りに專門的でなく又常識的でなきは何人も必讀すべき哲學である。

**現代生活のどん底より生れたる新哲學**

**内容日次**

一序論……二自由文化の建設……文化の方向の具體的考察……自由文化の建設……三自我の意義……自我と純粹自己意欲……當爲性……文化性の考察……四自我の發展……文化考察の二方面……當爲性の發展……自由性の發展……形而上性の發展……五結論……自由文化の內容……自由と愛……自我哲學と文化哲學……附錄三篇……

■津田光造氏新著■

# 二宮尊德の人格と現代

■四六判最上製 美本四百頁 金壹圓八拾錢 送料十二錢

## 最新刊

本書は『二宮尊德の民主生活』の姉妹編として書いたものである前のは翁の哲學若くは思想生活を主として紹介したのであるが今度のはあの哲學を生むに至つた翁の人格と生活との評價を試みそれの現代との關係を論究しようとしたものである。過去の偉人に對して代名詞に「翁」とか「先生」とか云ふ敬稱を用ふる事は吾々の禮儀であり尊崇の表示であるにも拘らず、本書は必ずしもそれに據らず、時に之を用ひ、寧ろ「金次郎」とか「彼」とか云ふ平常の樣式に出づる事が多かつたのは本書が單なる傳記でなく評傳であるからである。斯かる意味から私は今度の試みに於て一方に於て益々彼の聖人味を高調する事を努めたと同時に又他方に於て出來る丈彼の人間味を發揮する事を忘らない事にした。卷末に載せた「青年教師の懷疑」は一青年教師の現代義の教育と生活とに對する止み難き反抗の聲であり其感想の手記である彼が二宮尊德の人格と生活とに接して如何なる感化を受けしかは偏に讀者の批判に待つ。

津田光造著■ 二宮尊德の民主生活 全 金九十錢 送料八錢

東京神田表神保町七

**大同館發行**

---

大同館發行圖書目錄

◇鈴木善太郎氏新著◇

# 小說 暗示

■四六版最上製 美本五百頁 金貳圓五拾錢 送料金十二錢

《三田文學批評》……特異なる材料を捉へて以て人生の頂點を描けるもの乃ち氏が藝術獨特の境地にしてこれ詩人にして同時に科學の奉仕者たる氏が常によくその試に成功を克ち得たる所以なり。本書はその傑作約二十編の小說を輯めたるものにして代表的選集を以て目すべきものなり。最なる科學の上に培はれた想像が如何に怪しく美しく花咲けるか讀む者をして强く魅し去るを覺えしむ。文壇の珍重すべき收穫として敢て文藝愛好の人士に一本をすゝむ。……との大好評を博しつゝある。

（著者曰く）わたくしは生涯の殿堂を築く爲めの一枚の瓦として本書を出版し未知の讀者に尊敬と熱愛との中にこれを贈るのである。人生の旅路への新しい出發としてたとへ其效果が價値のないものであつたとしてもそれはわたくしに取て希望や光榮や法悅を感ずべき人生の夜明であつた。生涯の記錄の中の最も感謝すべき記念塔である。

内容目次

▼人生の扉をあけて 示
▼ある掏模の手紙 ▼彼の一兵卒 ▼婦人傍聽席
▼金時計と銀時計 ▼支丹 ▼ヒステリーの話 ▼川の祈り
▼支那皿の怪 ▼切鯖中毒の發見者 ▼忘却
▼祭日の出來事 ▼通信員モーリス ▼二百八十九 ▼喇嘛副平の客

## 大同館發行圖書目錄

◇津田光造氏新著◇ —(山本鼎畫伯裝釘)—

# 新刊發賣

# 長篇小說 大地の呻吟

四六版最上美本
全壹册四百餘頁
金壹圓八拾錢
送料十二錢

著者が心血を濺ぎて成り
し堂々五百枚の大著作

世のブルジョアの誰でもが持つて居る樣なそして持ちたがつて居る樣な名譽とか人格とか財產とか地位とか乃至は虛榮とか云ふものを吉岡信三は持つて居たのであつたが階級的で不平等な社會の現狀に絕えず不滿を持つて居た彼は遂に自由の無い職業から解放されようとして妻を失ひ子供と別れた。彼はその孤獨と悲哀とから免れようとして樣々な屈辱と苦みとを經驗したが結局彼は財產の私有と空虛な各譽心とを無くしてしまふより外に途がなかつた。そしてそこに彼の人格の一大破產が來た。

◇三浦修吾氏新著◇ —《著者が好んで執筆せし文集》—

# 忽三版 感想林檎の味

四六判最上美本
金壹圓八拾錢
送料十二錢

災難病苦あらゆる人生の苦難を經て終に人間內在の偉大なる力を把捉し得たる著者の生活史思想史に織り込まれたる觀察である紀行文あり隨筆あり感想あり著者の卒直なる氣風は本書においてのみうかゞひ知らる。

文部省にて國民道德の參考資料とし撰定せられし名著

新井白石著 讀史餘論

四六判上製美本 紙數三百頁 正價金貳圓 郵稅十二錢

本書は新井白石が殿中にて古今大勢の變遷を講述したる時心血を濺ぎてなれる草稿にして彼の賴山陽の外史の如きも本書に負ふ所少からずと云ふ今や文部省にて國民道德參考用書として撰定せらる、以て本書の價値を知るべし。各學校史學研究者は勿論一般讀書子も是非壹本を書架に置くの要あるべし。

好評五版

校訂嚴密異本を參照せしは本書の一大特色

◉御注意◉ 御買求めの節は大同館發行と御申添へ下され度候◉

發兌 東京市神田區表神保町六番地 振替口座東京八七貳番 大同館

東京帝國大學文學部教授文學博士吉田熊次序　市川一郎譯著□

# 教育の基礎たる哲學

常識と科學との部分的人生觀及教育觀を排して哲學的卽ち全體的人生觀及教育觀を與へ以て我國教育家をして明晰なる思想の所有者たらしむることと之れ本書の使命なりとす。明晰なる思考より生ずる驚異すべき力の利用は凡ての事業を最も有效に而も極めて容易く且大なる喜悅を以て爲さしむるは多言を費さずして明かなるべし。原書は米國最近の名著、譯文亦平易簡明哲學的要素養の皆無なる人士と雖も易々として現代哲學の概觀を捉提し健全なる哲學的人生觀及教育觀を樹立し得、以て從來と全く異りたる意義あり價値ある新生命を開拓し得んこと疑なし。

**我教育家をして明晰なる思想の所有者たらしむることと之れ本書の使命なり**

内容目次

緒論：第一章科學の目的範圍並に方法：第二章哲學の目的範圍並に方法：第三章科學と哲學との一般的關係：第四章哲學と教育との關係：第五章主意的唯心論の倫理學の教育的意義：結論：

四六判最上製美本
正價貳圓五拾錢
送料十二錢



『變態心理』主幹文學士　中村古峽氏新著

第七版

# 變態心理の研究

——(四六判最上製美本全壹册五百頁　正價金貳圓五拾錢　送料十二錢)——

本書は、變態心理學に造詣深く、且つ催眠實技に於て、殆んど入神の技能を有せる著者が、催眠現象を初め、潛在精神▽二重人格▽幽靈の出現▽狐狸の憑依▽透視念寫並に不良少年精神病者の心理等、諸種の變態心理現象を飽くまで、學術的且つ通俗的に說明したる、我學術界唯一の新著にして、特に世上の山師が、心靈を名として、諸種の瞞著手段を行へることを素破拔きたる一章は、最も痛快を極む。著者は更に、多年の實驗中より、精神治療の實例十數種を詳細に報告し、就中二重人格者の施術法及夢の新實驗等は、全く著者の創意に屬す。教育家、宗教家、醫師、法曹家は勿論、一般家庭の父兄諸氏の必讀を望む。

**我學界隨一の新著**

# 最新刊

# 熱と力と涙とに輝く本願寺全史

——（四六判最上製美本 全壹冊六百餘頁 正價參圓貳拾錢 送料十八錢）——

東洋大學教授 三氏序
東京帝國大學教授 島地大等
東京高等師範教授 境野黃洋
東洋大學々長 加藤咄堂

中村碧潮
松岡良友 共著

**好評激甚**

**一世の豪雄織田信長をして拔き難し南無の六字城と嘆ぜしめた所以のもの一に之れ信仰の力であり民衆の力である**

世善如より七世存如）—第三期中興時代（八世蓮如）—第五期東西分立時代より現代—までの波瀾重疊一起一伏を明鏡に照して詳說評論せし教界稀有の良書なり。文章は平易簡明にして趣味亦津々として盡きざるべし。眞宗五百萬の門徒と二萬有餘の寺院住職は勿論心を人生問題生活問題等に潛むるの士は是非一度本書を繙かざるべからず。

實如より十一世顯如）—第四期戰國時代（九世伏を明鏡に照して詳說評論せし教界稀有の良書なり。文章は平易簡明にして趣味亦津々として盡きざるべし。眞宗五百萬の門徒と二萬有餘の寺院住職は勿論心を人生問題生活問題等に潛むるの士は是非一度本書を繙かざるべからず。

世に親鸞を說き蓮如を語りしものは決して尠からず。されど宗祖以來六百有餘年終始民衆を中心として活動せし本願寺全史は未だ發見せざるべし。本書は第一期草創時代（親鸞より三世覺如）—第二期奏靡時代（四



# 日本教育學說の研究

□□渡部政盛先生新著□□ 菊判最上製表本 全壹冊五百餘頁 參圓五拾錢 送料金廿四錢

**文檢受驗者の最大福音**

我が國の教育學は今や全く行詰て仕舞つた。吾人は之を打開せねばならない本書は斯くの如き貴き使命を帶びて公にされたものである。內容は諸論：第一章明治前半期の教育學說：第二章日本輓近の教育學說：第三章個人的教育學說（谷本）第四章社會的教育學說（熊谷、樋口、吉田、田中、野田）：第五章調和的教育學說（大瀨、森岡、小西溝淵）：第六章生活完成の教育學說（下田）：第七章文化的教育學說（乙竹）：第八章人格的教育學說（中島）：第九章實際的教育學說（澤柳）：第十章自動的教育說（河野）：第十一章公民的教育說（川本）：第十二章創造本位の教育說（稻毛）：第十三章分團動的教育說（及川）：結論：の諸章より成つてを る。特色は諸家の學說の詳叙と忌憚なき批判とにあるは言ふまでもない。隨て學者先づ本書を讀むの義務があり。教育學者文檢受驗者は本書に依つて學者の說の要點と長短とを知る必要がある敢て弊館の大言以て江湖に本書を推薦する所以である。

▼世界の日本、東洋の日本、我等が日本、これをこの書に得よ

□東京帝國大學
□文科大學助教授　文學士　植松安先生新著□□（最近の名著）

# 好評四版　古事記新釋

難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書き下し振假名を附し詳細なる語義と其索引を添ふ。著者が國民心理を基礎として神代と上古との風俗人情に下したる評論的文章は各段章に顯はれて大和民族發展の由來を明にし國民歸嚮の中心を說く。是れ本書の特長なり。今や大戰終局して世界思想の急激なる變動は將に我國民思想に及ばんとす世界の日本。東洋の日本。我等が日本。これをこの書に得よ。（類書中の白眉）

**難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書下し振假名を附し詳細なる語義と其索引を添ふ**

菊判最上製美本
全一冊五百頁
正價金貳圓五拾錢
郵稅金拾貳錢

---

東京帝國大學文科教授　文學博士　姉崎正治
東京帝國大學文科講師　文學士　鈴木宗忠共著

# 信教の自由と學問の獨立

**現代思想界必讀の名著**

現代は實に精神的な自由文化の建設時代である。歐洲人は現時の悲慘なる世界大戰の壓迫の下に益々この要求と憧憬とを强化しつゝあることは眞實である。而して眞の文化は言ふまでもなく各個人の精神的自由を惱なく發揚するものであるが、政策上より外部的に見るときは如何ほど迄信教の自由と學問の獨立とが實現せらるゝかによつてその文化の程度を判斷することが出來る。是において宗教と哲學と教育との關係と云ふことが國家及文化に於ける重要な問題である。本書は即ちこの問題を提へて政策上歷史上及思想上から精密に論究したもの現代の文化要求に對して新しい指導と敬虔なる信念とを與ふることを疑はない。原著者ルツアシチ氏は伊太利に於ける大政治家大法學者大信仰家であつて精神的學問の造詣最も深き人殊に國家と宗教との關係に就いては徹底的に研究した學者である。以て本書が現代の生活及至思想界にとつて如何に價値あるかが解かる。一般の讀者は勿論政治家教育家及び宗教家は是非一讀すべき良書である。

菊判最上製美本
全壹冊四百餘頁
正價金壹圓貳拾錢
郵稅金八錢

發兌　東京市神田區裏神保町七　大同館書店

## 大同館發行圖書目錄

早稲田大學講師 本間久雄氏新著 —(最新刊)—

# 現代の思潮及文學

—(四六判最上製美本 全壹冊四百餘頁 正價金貳圓參拾錢 送料金十二錢)—

**現代の民衆生活の立場から解說批評せし文化問題二十講出づ**

吾々の生活をよりよくし、より豐富にするには如何にとかき——。かういふ實生活的要求を根柢として多種多樣な混沌として歸趨するところなき近代並に現代の思潮及文學中より最も重要なる二十種の問題を因へてそれを檢校し解說し批評し講述したのが本書である。而も著者は飽くまでも謙虛な心と穩健平明な文章とを以てしてゐるから新生活の要望者にはもとより一般の人々にも充分興味ある暗示と啓發とを與へるであらう。

**内容目次**

第一章 社會改造運動と當來の文藝……第二章 民衆藝術の意義及價値……第三章 ウイリアム・モオリスの民衆藝術論……第四章 德川時代に於ける民衆藝術の勃興……第五章 解法の詩人……第六章 人生派の批評と藝術派の批評……第七章 藝術の社會的價値……第八章 ボサンケ氏の美學……第九章 グライブ・ベル氏の戰爭と藝術……第十章 國家主義と世界主義……第十一章 二つの愛國心……第十二章 現代とジャーナリズムの意義……第十三章 二種の平和論……第十四章 性的道德の新傾向……第十五章 現代婦人と世界的不安……以下略す

終